



障害当事者に

私は今年の初めに、くも膜下出血により自宅で倒れました。定年退職まで、3ヵ月を切ったときに私を襲った予期せぬ病気に驚き、絶望しましたが、家族にとっても大変な心配と不安であったと思います。長時間、数回に及ぶ手術の過程で、視機能に損傷を受け右目の視力が相当程度失われたため、現在は左眼に頼った生活をしています。

これまで数十年、障害のある子どもの教育研究に参加してきましたが、自身が障害のある当事者として生活するのは初めての体験です。障害当事者となって実感したことは、さまざまな日常動作の困難です。両眼での生活が60年以上続き、ある日突然片目の生活になったとしても簡単に適応できるものではありません。全体的に視力が落ち、また視野も狭くなったために細かいことを見落とししたり、つまずきやすくなったりしています。風景や人の表情がピンボケ状態だと気分も落ち込んでしまいます。

日常生活の不便さは、自宅のバリアフリー改修により相当程度解決しましたが、外出の際は訪問先がバリアフリーであるかどうかを確認するなど、気をつかうことが多いです。

後ろ向きでは解決しない

日常的な動作が以前のように適切に処理できないので、どうしても困難を先に意識し、行動や思考が後ろ向きになってしまいます。以前の自分と比べ、何事も上手くできないことを歯がゆく思ってしまう。一緒に生活している妻にも

励ましが自信に

弘前大学名誉教授 **安藤 房治** さん

「何事もうまくいかない」とついぼやいてしまいます。すると妻は、「この前まで入院していたんだもの」とか「この前まで寝たきりだったんだもの」と言いながら、私が洗濯や炊事など家事ができること、家のなかで自立して行動できることを評価し、励ましてくれました。そんななかで徐々に日常的に「できる」ことに自信がついてきたような気がします。そうして、自らの障害に向き合う姿勢にも変化を感じはじめました。最近は、ようやくそんな思考では何も生まれない、解決しないと考えつつあります。

*

今、二つの本を執筆しています。一つは、青森の障害児教育史をまとめること、もう一つは、障害をもった体験に向き合ったことについて書いています。これらをまとめていると、今が今の生活での楽しみです。

あんどう ふさじ / 1948年大分県生まれ。アメリカや日本の障害児教育保障の歴史を研究する。専門は、障害児教育。2013年、全障研全国大会（青森）の準備委員長として大会を大きく成功させた。全障研青森支部支部長。